

Nara National Museum

奈良国立博物館

だより

第90号

平成26年 7・8・9月



国宝 薬師如来坐像〈部分〉(薬師如来及び両脇侍像のうち) (京都・醍醐寺)

特別展

醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展

国宝 醍醐寺のすべて

—密教のほとけと聖教—

7月19日(土)～9月15日(月・祝)

東・西新館

名品展

珠玉の仏たち

～9月7日(日)

なら仏像館

中国古代青銅器

通期開催

青銅器館

※なら仏像館は、9月8日より休館します。
(詳細は中面をご確認ください)

仏像の修理は、損傷の進行をとめて健全な状態を維持し、ながく後世に伝えることを目的とするが、傷みの程度を確認して補強などの適切な処置を施すために、解体作業をとまなうことが少なくない。そのため修理時には、外からはうかがい知ることの難しい構造、技法の特徴や、銘文・納入品の有無などが明らかとなる。それらの情報は調査や写真に記録され、修理が完了すれば仏像は本来の姿にもどされる。こうして得られた貴重な情報は、文化財の保存や後世の修理の指針となるだけでなく、美術史の研究にも有益となる。

研究と修理とを不可分のものと考え、十分な調査をおこなって詳細な記録を残すことは、日本美術院設立当初からの伝統で、当館の資料にも修理時の調査と設計書、そして修理後の解説書や図解などが含まれる。ガラス乾板には解体された仏像やその像内の様子も写る。これらから、東大寺法華堂、法隆寺、唐招提寺金堂の諸像など、古社寺保存法制定直後より精力的におこなわれた修理の内容が知られる。また、大正十二年（一九二二）九月に発生した関東大震災では、鎌倉地方の仏像にも甚大な被害がおよんだが、翌年に美術院（大正三年に日本美術院から改称）が設置した鶴岡八幡宮境内の臨時工房での修理記録も多く残る。今春の特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像―追真とエキゾチシズム」で私たちを魅了した仏像のなかには、実はこのときに被災した作品がある。円応寺初江王像の生動感あふれる姿や浄光明寺観音菩薩像のしなやかな肢体からは、かつて大破した痕跡をうかがうべくもないが、これらも美術院の手で修理が施されたのである。そして、昭和十一年（一九三六）から足かけ二十一年もの歳月をかけておこなわれた妙法院千手観音像千一体の修理では、各像の図解はもとより、銘文の書き起こし

や拓本が大量につくられた。

国や所有者に納められた記録の多くが戦災等で失われたいま、もと工房側の控えであった当館所蔵分は、往時の修理を記憶するほぼ唯一のまとまった資料なのである。



文化財を守り伝える。現代では当たり前のように聞こえる言葉だが、その背景には、天心や新納らの決死の覚悟や、災害時や戦中・戦後の混乱期にも修理を続けた技術者たちの苦労があった。そして修理の成果を確かな記録として残していく地道な努力もあった。こうした伝統はすべて今日に受け継がれている。

今回のデータベース公開によって、この修理記録が文化財の研究や修理に携わる方々に活用されることを願うのはもちろん、文化財に関心を寄せる多くの人びとにとっても、文化財を守り伝えるという営みに改めて目を向けるきっかけとなれば幸いである。



「日本美術院彫刻等修理記録」



データベースはセンター閲覧室のコンピュータで公開中。薄冊・ガラス乾板ともにすべての画像を通覧できる。キーワード検索も可能。

【表紙写真解説】

薬師如来及び両脇侍像 三軀



国宝 木造・漆箔
像高（薬師如来）一七七・〇cm
（日光菩薩）一一〇・〇cm
（月光菩薩）一一一・〇cm
平安時代（十世紀）
京都・醍醐寺

いま下醍醐の霊宝館に移座されるが、もと上醍醐薬師堂の本尊として伝来した三尊像。

薬師堂は、勅によって醍醐寺開山の聖宝が延喜七年（九〇七）に造り始めたもので、同九年の聖宝没後は弟子観賢がこれを引き継ぎ、同十三年十月二十五日までには完成していた。本三尊像はこの薬師堂の本尊として造立された当初像に該当する。

中尊薬師如来像は、光背に付属する六軀の小化仏と本体とで合わせて七仏薬師を表現するものとみられ、護国経典たる『七仏薬師経』に基づく造像であると知られる。重厚な体型や男性的な相貌も、そのような性格を有する尊像としてまことにふさわしく眺められる。

一方、両脇侍像は量感を強調せず、過不足ない身体の抑揚を示す品のある姿である。中尊は半丈六を凌駕する巨像であり、両脇侍は等身を下回るサイズで、法量のアンバランスはあるものの、作風の基盤は共通すると見え、当初からの一具像とみてよいだろう。

制作の時期および安置場所の判明する基準作であり、天皇の勅を受けて造られた大作として、彫刻史上に有する価値はゆるがないものがある。

岩田 茂樹（当館学芸部 席研究員）